

大会に参加して、そして感じたこと

東洋大学 丹野朝栄

十月二十五日、七ヶ宿から峠を越えて、山形県に入った。県境への道程で、右側に稜線をくっきりと見せている蔵王連峰の佇みに、感動した。躍動する春の気配とは違って、頂上から麓までの蔵王の織りなす自然の優雅さに誘われ、目的を達しようかとの一瞬の戸惑いを、勝手に振り払いながら、県境を越えた。曲がりくねった道、ダンプと擦れ違いつつ、高畠に到着した。奥羽山脈の東側は頗る天候に恵まれていたのだが、西側は雲が重く垂れ込めていた。人知では測ることのできない、自然の業を微かに想いながら、平坦な道を進み、目的地、ちょっぴり違和感があった南陽市の会場に跡り着いた。自然の業、それに支えられているのが、第一次産業、そして「村」である。

村研は今度で、四回目(津和野、糖平、柳川)である。本年、事務局の配慮で、何年間か納めていなかった会費を完納し、そのお陰でかかる役割を担うことになったのかも知れない。大会では何も発言せず、椅子に座ったり、立ったりで、参加の意味すら不明確な私に、参加の意味を問うてきた武田さんに半分感謝と、私にかかる文章を依頼してきた安直な発想に疑義を呈しながらも、

大会に参加(内田義彦氏の言葉を借りれば一定の役割を果たす)して感じたことを記すことにより、役割を果たすことにする。

不明確といっても一定の目的を持っていた。現在私の関心は、東北地方にある農業高校の卒業生にある。今年まで、庄内農、小牛田農、盛岡農の卒業生、とりわけ庄内農の人との接触が長い。何故に農業高校の卒業生かの説明はさておき、庄内でお話を聞いた人のなかに、鯉湖学園の卒業生で、有機農業を行っていて、その接点でもある中島紀一さんのお話を聞いてみようと思ったこと、このことを含めて、自然と人間との接点である有機農業について、テーマ・セッションが設定されていることが足を運ばせたのである。

確か二〇年位前、或る本「土と女」を読む機会にめぐりあった。出稼ぎの夫を案じながらの文章だったように記憶している。不確かな記憶のなかで鮮明に覚えている箇所がある。農作業をしながら、夫が土を舌で味わっていた話である。土の舌での感触、つまり肥沃の度合、土の状況を舌で確かめたのである。まさに土は生きており、呼吸しているのである。都会の土は、アスファルトで蓋され、息をしているという状況ではない。

高田和喜三さんの発表、そして有機農業に関する発表を、耳にしながら、改めて土のもつ役割、土と人間の関わりに想いを馳せられた。同じ土でも減反で放置されたそれと、人が丹念に関与した土では、自ずとその質が違っている。土と人との関係は常に問うべき課題ではと……感じた。

第二は漁村研究がないことに、ちょっと困惑した。第一次産業を地場とするところが、一九六〇年以降、工業の発展のなかで、その人口を減らし、過疎・過密の問題、出稼ぎ、産業従事者の高齢化等々が進行し、他方で公害問題、環境をめぐる問題が生じている。時の流れに幾分かの変化はあるにしても、これは普遍的な事象である。

自然や環境(よりよい)との共生が、魚眉の課題になっている今日、自然の織りなす業の現状を、山村、ひら場の村、そして漁村という地点を一本の川として辿りつつ、それぞれの地点で、人々の日常生活との関わりを分析すること、点・点・点を一本の線で結んで、平面的、立体的に研究する視点が必要になっているのでは……。

第三は、テーマ・セッションで感じた二つのことを記すことにしよう。一つは、大上段に振りかぶることに一種の気恥かしさと、既に常職であるとの確信を持ちつつ、憲法二十三条、学問の自由とは、を考えさせられた。学問の自由の担い手は、という問いは、古くて新しい、問題である。成文上では、第三章、国民の基本的権利と義務で決着している筈なのが、教科書問題(裁判)を繕くまでもなく論議の対象になる。前述の内田は、森鷗外が日本人にはフォルシュング(探求)の精神が欠けていると指摘したことを受け止め、国民ひとりひとりがフォルシュングの権利を有すべきと明言している。従って、この観点からすれば、研究者のみならず、さまざまな職業に携わっている誰もが探求の権利(学問の自由)を有しているとさえ言える。

それ故、テーマ・セッションの持っている意味を、私なりに理解すると、学会員と非会員との共同研究、相互交流、「研究者」と非研究者間での同様の行為、こうしたことの積み重ねが憲法二十三条の豊饒化に寄与し、学問全体を発展させる礎を築いてゆくのではと……秘かに感じた。

二つめは、高島も典型的な例であるが、一九六〇年前後、全国各地で青年を中心とした、学習活動、青年団活動、社会教育活動が展開された。これらの活動は、六〇年以降、各々の地域にさまざまな影響を及ぼしている。担い手だった人が、その後当該地域とどのように関わってきたか

を、個別的に追い求めることにより、何等かの将来への糸口が拓けてくるのではと、……甘い(?)期待を抱いた。

テーマ・セッション議論の途中で、会場を後にした。旧笹谷街道から仙台に帰る途を選んだ。岸の周辺は野分を想わせる風、そして時々雨が、親もとを離れた葉を弄んでいた。都会とは違って土の多いところなので、やがて安息の場を求め、新たな生命を育むための準備作業に入り、役割を果たすに違いない。自然との上手な付き合い方を思案しつつ、有機農業が二十一世紀の主力になることを念じつつ……。